

3. 重要な鳥類と生息環境

(1) 重要な鳥類と生息環境の選定基準及び価値基準

これまで宗像市で記録された鳥類の渡り区分、天然記念物、種の保存法の指定状況、各レッドデータブックの選定状況及び宗像市における生息状況の概要を表6-3に示す。宗像市で記録された鳥類のうち、法律やレッドデータブックに選定されている種は55種である。これらのうちから、偶発的なもの、特に重要な生息地とはなっていないものについては除外し、宗像市における生息状況を考慮して重要な鳥類を選定した。

①ランク1

このランクは世界的に見て生息数が少ないもの、生息地（繁殖地・越冬地）が限られているものとした。基準として、IUCN、環境省のレッドデータブックの絶滅危惧Ⅱ類以上とした。このランクに選定された種は、国際的レベルで保護・保全が求められているといえる。このランクに選定したのはヒメクロウミツバメ、ミゾゴイ、トモエガモ、カンムリウミスズメ、ウチヤマセンニュウの5種である。

②ランク2

このランクは国内での分布が限られるものまたは近年著しく減少しているものとした。このランクに選定したのはオオミズナギドリ、オオタカ、ヤマドリ、ケリ、カラスバト、ヨタカ、サンコウチョウの7種である。

③ランク3

このランクは宗像市には比較的普通に生息しているものの他地域では減少もしくは個体数が少ないものを選定した。現時点では比較的個体数は多いが、宅地開発などにより、影響を受けるものを選定した。このランクに選定したのはキジ、ミサゴ、サシバ、ハヤブサ、タマシギ、アオバズク、オオヨシキリ、キビタキの8種である。

④学術的に重要な種

このランクは、特に学術的な面で重要な種とした。このランクに選定したのは特異な分布をみせるリュウキュウコノハズク1種である。

表 6-3 宗像市で記録された鳥類の法律及びレッドデータブックの選定状況（その 1）

No	種名	渡り区分	繁殖	法律・RDB指定状況					確認状況		概要									
				天然記念物	種の保存法	環境省RDB	福岡県RDB	IUCNレッドリスト	今回	文献										
1	カンムリカイツブリ	冬鳥					VU		●	●	鐘崎から神湊にかけての海域に10~20羽が飛来し越冬するほか、多礼貯水池などでみられることもある。									
2	ヒメクロウミツバメ	夏鳥	●				VU	CR	●	●	沖ノ島属島小屋島で繁殖する。生息数は200~300羽と思われる。									
3	ヒメウ	冬鳥					EN		●	●	海域に冬鳥として渡来する。大島、地島には個体数が多い。									
4	サンカノゴイ	冬鳥					EN	NT	●	●	曲の長把池で確認されたほか、沖ノ島で記録がある。宗像では稀に飛来する程度と思われるが、長把池では定期的に飛来している可能性もある。									
5	ヨシゴイ	旅鳥					NT	VU		●	●	沖ノ島で記録がある。								
6	オオヨシゴイ	迷鳥					EN			●	●	沖ノ島で記録がある。								
7	ミノゴイ	夏鳥?	○				EN	VU	EN	●	●	今回の調査では沖ノ島で渡り途中のものが観察されただけであるが、城山、自由ヶ丘で繁殖期の記録があり、繁殖の可能性が高い。								
8	チュウサギ	夏鳥					NT	NT		●	●	春から秋に市内の水田で広くみられる。市内に繁殖コロニーは見つかっておらず、鞍手方面から飛来しているようである。								
9	コウノトリ	迷鳥		特天	国内		CR					●	●	玄海町での古い記録がある。						
10	アカツクシガモ	迷鳥					DD				●	●	名残の調整池で記録がある。							
11	オシドリ	冬鳥					DD	NT		●	●	●	●	吉田ダムに数十羽が飛来し、越冬する。						
12	トモエガモ	冬鳥					VU	VU	VU	●	●	●	●	近年吉田ダムで100羽前後が越冬するようになった。						
13	ヨシガモ	冬鳥							NT	●	●	●	●	神湊沖の海上で数十羽が飛来し、越冬する。内陸の溜池に飛来することもある。						
14	アカハジロ	迷鳥					DD	NT	VU	●		●	●	多礼貯水池で記録がある。						
15	ミサゴ	留鳥	●				NT	NT		●	●	●	●	地島、大島の崖地で繁殖し、繁殖密度は高い。沖ノ島でも繁殖している可能性が高い。海域、釣川の河口から中流、溜池などでよくみられる。						
16	ハチクマ	旅鳥					NT	NT		●	●	●	●	春・秋に上空を通過する。特に秋はハチクマの渡りルート上にあたるため、通過する個体数が多い。						
17	オオタカ	留鳥	●		国内		NT	NT		●	●	●	●	宗像市内で営巣が確認されている。その他の地域でも観察されていることから、他に数つがい繁殖している可能性が高い。						
18	ハイタカ	冬鳥					NT	NT		●	●	●	●	秋から春に市内各地で観察される。						
19	サシバ	夏鳥	●				VU	NT		●	●	●	●	夏鳥として飛来し、山沿いで繁殖する。						
20	チュウヒ	旅鳥					EN	EN		●	●	●	●	地島で渡り途中と思われるものが観察された。宗像では稀。						
21	ハヤブサ	留鳥	●		国内		VU	VU		●	●	●	●	沖ノ島、大島、地島の崖地で繁殖する。内陸でも繁殖期によく観察されることから、採石場などで繁殖している可能性もある。						
22	ウズラ	冬鳥					NT	DD			●	●	●	●	沖ノ島などで記録がある。					
23	ヤマドリ (ツバメドリ)	留鳥	●				NT	VU	NT		●	●	●	●	城山、許斐山などで観察記録があり、山地に広く生息すると思われるが、個体数は多くない。					
24	ナベヅル				国際		VU	VU	VU		●	●	●	●	上空通過の記録がある。					
25	ヒクイナ	留鳥	●				VU	NT		●	●	●	●	●	釣川の中流域で繁殖すると思われるが、生息状況は不明。					
26	タマシギ	留鳥	●					NT		●	●	●	●	●	釣川流域の水田地帯で繁殖する。					
27	イカルチドリ	冬鳥						VU		●	●	●	●	●	日の里の蓮池で秋に観察された。冬鳥として少数が飛来する。					
28	ケリ	留鳥?	○					NT		●	●	●	●	●	大穂の水田で観察された。福津市・宮若市では繁殖しており生息数も増えているので、近い将来宗像市でも繁殖するようになると考えられる。					
29	ウズラシギ	旅鳥						VU		●	●	●	●	●	久原の水田で春に少数飛来する。					
30	タカブシギ	旅鳥						VU		●	●	●	●	●	久原の水田で春に少数飛来する。					
31	オグロシギ	旅鳥							NT	●	●	●	●	●	春に久原の水田で観察された。					
32	ダイシャクシギ	旅鳥						VU		●	●	●	●	●	沖ノ島で記録がある。					
33	ホウロクシギ	旅鳥					VU	VU	NT		●	●	●	●	沖ノ島で記録がある。					
34	コシャクシギ	旅鳥			国際		EN				●	●	●	●						
35	コアジサシ	旅鳥			国際		VU	VU			●	●	●	●	鐘崎から神湊にかけての海域でみられることがある。					
36	ウミスズメ	冬鳥					CR			●	●	●	●	●	鐘崎から神湊にかけての海域でみられることがある。					
37	カンムリウミスズメ	夏鳥	●	天			VU	CR	VU	●	●	●	●	●	沖ノ島属島小屋島で繁殖する。つがい数は20前後と思われる。					
38	カラスバト	留鳥	●	天			NT	VU	NT	●	●	●	●	●	沖ノ島、大島、地島で周年見られ、生息密度は高い。					
39	コノハズク	旅鳥						EN			●	●	●	●	渡りの季節に沖ノ島・地島で記録がある。					
40	リュウキュウコノハズク	夏鳥?							NT						●	●	●	●	●	沖ノ島で夏季に観察され、個体数も少なくない。生息状況は不明な点が多い。

表 6-3 宗像市で記録された鳥類の法律及びレッドデータブックの選定状況（その2）

No	種名	渡り区分	繁殖	法律・RDB指定状況					確認状況		概要	
				天然記念物	種の保存法	環境省RDB	福岡県RDB	IUCNレッドリスト	今回	文献		
41	アオバズク	夏鳥	●				VU		●	●	夏鳥として渡来し、市内の社寺林で繁殖する。	
42	ヨタカ	夏鳥?	○			VU	VU		●	●	大島で渡り途中のものが観察された。市内でも繁殖している可能性が高いが、近年各地でみられなくなっている。	
43	アカショウビン	旅鳥					VU			●	渡りの時期に記録がある。	
44	ブッポウソウ	旅鳥			EN	EN			●	●	渡りの時期に記録がある。	
45	サンショウクイ	旅鳥			VU	VU			●	●	主に春、渡り途中のものが観察される。	
46	チゴモズ	旅鳥			CR					●	沖ノ島で記録がある。	
47	アカモズ	旅鳥			EN				●	●	主に春、渡り途中のものが観察される。	
48	ヒレンジャク	冬鳥						NT	●	●	冬から春にかけてみられるが、年による変動が大きい。群れで行動し、市内の街路樹や住宅地にも飛来する。	
49	コマドリ	旅鳥						NT	●	●	渡りの季節に通過する。今回孔大寺山で冬に観察されたことから、少数が越冬している可能性が考えられる。	
50	ウチヤマセンニユウ	夏鳥	●			EN	EN	VU	●	●	沖ノ島に夏鳥として飛来し、繁殖する。生息数は調査されていないため不明であるが、数十つがいはいれると思われる。小屋島でも観察例があり、繁殖している可能性が高い。	
51	オオヨシキリ	夏鳥	●					NT	●	●	曲の長把池で2～3つがい繁殖するほか、釣川・朝町川合流点付近でも繁殖している可能性がある。	
52	キビタキ	夏鳥	●					NT	●	●	市内各地の樹林に夏鳥として飛来し、繁殖する。	
53	オオルリ	夏鳥	●					NT	●	●	城山、磯辺山などで繁殖期の観察例がある。繁殖数は少ない。	
54	サンコウチョウ	夏鳥	●				VU	NT	●	●	夏鳥として渡来する。城山、新立山、名残、大井、田島などで観察された。	
55	シマアオジ	旅鳥			CR			NT	●	●	渡りの時期に沖ノ島、大島、地島などで観察されることがある。	
56	ノジコ	旅鳥				NT		VU	●	●	渡りの時期に沖ノ島、大島、地島などで観察されることがある。	
57	カササギ	留鳥	●				保全対策依存		●	●	市内各地で繁殖するが、多くない。	
				3種	6種	37種	42種	17種				

(2) 宗像市の重要な鳥類と生息環境

①ランク1

・ ヒメクロウミツバメ

ヒメクロウミツバメは、ミズナギドリ目ウミツバメ科の海鳥である。繁殖地は極東アジアの沿海域で、ロシアのウラジオストクで約7,500つがい繁殖するほか、日本、朝鮮半島、中国などで小規模なコロニーがみられる。日本での生息数は1,000羽以下と考えられ、現在確認されている繁殖地は福岡県沖ノ島属島小屋島、京都府沓島、島根県隠岐星神島で、岩手県三貫島でも繁殖期に少数が観察される。インド洋で越冬する。

環境省のRDBでは絶滅危惧Ⅱ類、福岡県のRDBでは絶滅危惧ⅠA類に選定されている。環境省のランクは絶滅危惧Ⅱ類であるが、現在の推定生息数を環境省のカテゴリー定義に照らし合わせると絶滅危惧ⅠB類とするのが適当と思われる。

小屋島には6月ごろ飛来し、ヒゲスゲ群落内の岩の隙間で繁殖する。10月には繁殖を終えて島を去る。1987年ドブネズミが侵入し、約300羽の成鳥が捕食され壊滅的な被害を受けるが、ネズミが駆除された後は徐々に回復し、現在200～300羽が生息すると推定される。

小屋島は国指定鳥獣保護区の特別保護地区に指定され、開発等による生息地の改変はないと考えられるが、再びドブネズミが侵入すれば短時間で危機的状況に陥ることになる。環境省では毎年小屋島を調査し、ネズミ類の侵入など繁殖地の異変がないか監視を行っている。日本での繁殖数は非常に少なく、繁殖地も少ないことから「ランク1」に選定した。



ヒメクロウミツバメ 小屋島 2006.8.4

・ ミゾゴイ

ミゾゴイは、コウノトリ目サギ科の水鳥である。日本でのみ繁殖し、台湾やフィリピンなど東南アジアで越冬する。生息数は1,000個体以下との説もあ

り、IUCNのレッドリスト、環境省のレッドリスト（2006年）とも「EN（絶滅危惧ⅠB類）」、福岡県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。

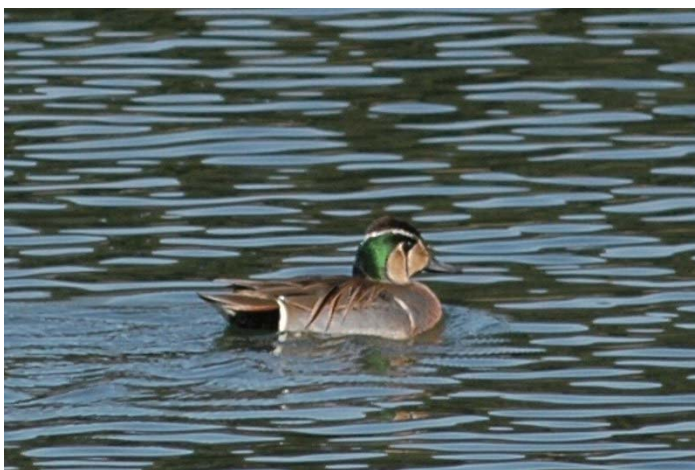
森林性のサギ類で、山地の溪流沿いや丘陵地の谷地田の森林に生息する。他のサギ類のようにコロニーは作らず、つがい単位でなわばりを形成する。夜行性で生息の確認が難しいが、繁殖期には夜間「ボー、ボー」と大きな声で鳴く。ミミズやサワガニ、カエルなどを捕食する。

今回の調査では4月29日の沖ノ島合同調査において、渡り途中と思われるものが1羽確認されたただけであるが、過去に城山と自由ヶ丘では繁殖期に鳴き声が聞かれているほか、大島でも観察例がある。釣川流域の丘陵地はミゾゴイの生息環境として適しており、繁殖している可能性は高いと考えられる。ミゾゴイは生息数が世界で1,000羽以下とかなり少ないことから、国際的レベルでの保護が求められていると言え、個体レベルでの保全が必要な種である。生息確認が困難なこと、生息地が丘陵地で宅地開発が容易な地域であることから、その存在がわからないまま個体数を減らしてきたものと考えられている。以上の理由から「ランク1」に選定した。

・ トモエガモ

トモエガモは、カモ目カモ科の水鳥である。極東アジアに分布は限られ、シベリア東部で繁殖し、朝鮮半島、中国東部で越冬する。日本ではかつて中部地方を中心に数十万羽が飛来していたが、1970年代以降著しく減少し、現在は全国で2,000羽程度が越冬する程度である。朝鮮半島では特に個体数が多く、一箇所に数十万羽が集まって越冬する。近年日本では個体数が増加傾向にある。IUCNのレッドリスト、環境省のレッドリスト（2006年）、福岡県のレッドデータブックとも「VU（絶滅危惧Ⅱ類）」に選定されている。

宗像市では近年吉田貯水池で群れが見られ、100～200羽が越冬する。今回の調査では、吉田貯水池のほかに日の里の蓮池で2羽、自由ヶ丘西町の豆ヶ浦池で1羽が観察された。100羽を超える越冬地は全国的にも少なく、国際的にも希少な種であることから「ランク1」に選定した。



トモエガモ 豆ヶ浦池 2006.12.24

- ・ **カンムリウミスズメ**

カンムリウミスズメは、チドリ目ウミスズメ科の海鳥である。日本近海にのみ生息し、その総個体数は5,000～6,000羽と推定されている。IUCNのレッドリスト、環境省のレッドリスト(2006年)とも「VU(絶滅危惧Ⅱ類)」、福岡県のレッドデータブックでは絶滅危惧ⅠA類に選定されている。福岡県では沖ノ島属島小屋島と志摩町の鳥帽子島で繁殖が確認されている。小屋島には3月ごろ飛来し、ヒゲスゲ群落内の岩の隙間で繁殖する。4月下旬から5月上旬に卵から孵化し、ヒナは1～2日で巣立ちする。小屋島では1970年には282～408羽の生息が推定されていた。しかし、1987年にドブネズミが侵入し、多くのカンムリウミスズメが捕食され、壊滅的な被害を受けた。被害の確認後迅速にネズミの駆除が行われ、1989年には4巣が確認されている。環境省の調査では毎年繁殖が確認されているが、個体数の推定は行われておらず、現在の生息数は不明である。鳴き声や標識調査の結果から10つがい前後が繁殖するものと考えられている。今回の調査でも4月29日の沖ノ島調査の際に小屋島に上陸し、複数の鳴き声を確認した。小屋島は国指定鳥獣保護区の特別保護地区に指定され、厳重な保護が図られている。しかし、再度ドブネズミが侵入すれば再び壊滅的な被害を受けることが予想されることから、ネズミ類侵入に対する密な監視を行う必要があり、現在は環境省により毎年監視が行われている。

繁殖地は日本沿岸に限られ、総個体数も少ないことから「ランク1」に選定した。



カンムリウミスズメ 小屋島 2006. 4. 29

- ・ **ウチヤマセンニュウ**

ウチヤマセンニュウはスズメ目ウグイス科の小鳥である。日本および沿海州、朝鮮半島で繁殖し、中国南東部、ベトナムなどで越冬する。IUCNの

レッドリストでは「VU（絶滅危惧Ⅱ類）」、環境省のレッドリスト（2006年）および福岡県のレッドデータブックでは「絶滅危惧ⅠB類」に選定されている。日本には夏鳥として渡来するが、現在知られている渡来地は伊豆諸島、熊野灘、玄界灘、日向灘、錦江湾などの島嶼に限定される。海岸の低木林に生息する。

宗像市では沖ノ島に渡来し、繁殖する。生息数は推定されていないが、海岸沿いの草地、低木林に広く分布し、生息密度も高い。また、小屋島でも繁殖期に観察されることがある。現状では繁殖環境の改変等の危機はないが、ドブネズミ等の侵入により個体群が減少することも考えられる。繁殖地は極東アジアに限られ、繁殖地も少ないこと、総個体数も少ないことから「ランク1」に選定した。

② ランク2

・ オオミズナギドリ

日本周辺の無人島で繁殖し、冬季はオーストラリア北部、インド洋東部海域などで越冬する。個体数は多く、減少傾向も見られないことから各種レッドリストには選定されていない。福岡県では沖ノ島のほか白島でも繁殖コロニーがみられる。沖ノ島では10万羽以上が生息すると推定されている。林床に巣穴を掘り産卵する。沖ノ島では現在のところ生息数は多く、減少傾向は見られない。しかし、沖ノ島ではノネコやドブネズミの生息が確認されており、これら移入動物による影響が懸念される。ノネコは現状では個体数は多くないと考えられるが、本種を捕食対象とすることが明らかとなっており、ノネコに襲われた可能性のあるオオミズナギドリの死体も発見されている。また、ドブネズミの生息も確認されており、オオミズナギドリは体が大きいいため、親鳥が襲われることは少ないと考えられるが、巣内の卵やヒナが襲われる可能性も懸念される。島嶼では移入された家畜等により本来の生態系が壊滅的な影響を受けることが多い。



オオミズナギドリ 沖ノ島沖 2006. 9. 4

・ オオタカ

オオタカはタカ目タカ科の中型猛禽類である。ユーラシア大陸および北アメリカに広く分布する。種の保存法の国内希少野生動植物種に指定されている。環境省のレッドリスト（2006年）および福岡県のレッドデータブックとも「準絶滅危惧」に選定されている。平地から山地の樹林地と農耕地が混じる里山的な環境に好んで生息する。日本では本州以北で繁殖するとされていたが、近年九州での繁殖例が増えている。宗像市でも繁殖が確認されたほか、各地で観察されている。最新（2006）の環境省版レッドリストでは、現在の生息数の推定値および西日本での増加傾向を受けて絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧に下げられた。しかし、増加傾向とはいえ九州での生息数は少なく、個体群形成の重要な時期にあたりと考えられる。オオタカは生態系の上位種にあたり、豊かな里山的環境の指標種として重要であり、オオタカの生息が維持されれば、里山環境の生態系が保全されることに繋がると考えられる。また、種の保存法の国内希少野生動植物種に指定されていることから、法的にも保護が求められている。上記の理由から、「ランク2」に選定した。



オオタカ 河東 2006. 12. 27

・ ヤマドリ

日本特産種で、本州、四国、九州に分布し、5亜種に分類される。北部九州に生息するのは亜種アカヤマドリである。IUCNのレッドリストでは「NT（準絶滅危惧）」に選定されている。また、2006年の環境省のレッドリストでは亜種アカヤマドリが準絶滅危惧に選定された。福岡県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。山地の森林に生息する。今回の調査ではヤマドリは確認されなかったが、城山や許斐山で観察記録がある。警戒心が強く、確認が困難であることから、現在も宗像市の山地に生息すると思われる。ヤマドリは狩猟鳥獣であり、狩猟による捕殺が行われている。今回の調査でも発見されなかったように、生息数は著しく減少している

ものと推測される。ヤマドリは日本特産種であり、地域による種分化が進んでいるため、遺伝子レベルでの地域ごとの重要性が高いと考えられる。

・ ケリ

ケリは、チドリ目チドリ科の水鳥である。極東アジアに分布は限られる。日本では近畿から中部地方に多いが、他の地域では少ない。北部九州では1980年代に鳥栖市で繁殖が確認され、その後徐々に分布を広げている。福岡県のレッドデータブックでは準絶滅危惧に選定されている。宗像市では現在のところ繁殖は確認されていないが、隣接する福津市や宮若市では繁殖しており、今回の調査でも繁殖期に大穂で観察されていることから、近い将来繁殖するものと予想されている。本種は増加傾向にあるといえるが、九州での生息数は少なく、個体群形成の重要な時期にあたると考えられる。よって「ランク2」に選定した。

・ カラスバト

カラスバトはハト目ハト科の大形ハト類である。日本の島嶼に分布するほか、朝鮮半島南部の島嶼にも少数が分布する。IUCNのレッドリスト、環境省のレッドリスト（2006年）とも「NT（準絶滅危惧）」、福岡県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。島嶼の照葉樹林に生息し、本土ではほとんどみられない。シイやタブなどの木の実を好んで食べる。宗像市では沖ノ島、大島、地島に生息し、個体数は多い。勝島については十分調査されていないため不明であるが、5月に上陸した際には確認されなかった。

現状では個体数は多く、生息環境の改変等の危機はない。しかし、分布が日本沿岸に限定される種であり、天然記念物に指定されるなど法的にも保護を求められる種であることから、「ランク2」に選定した。



カラスバト 大島 2006.4.8

・ ヨタカ

東～東南アジアに分布し、北方のものは冬季南に渡る。日本では九州以北に夏鳥として渡来する。平地から山地の松林や広葉樹林など明るい林に生息する。夜行性で、日中は木の横枝にとまってじっとしている。夕方からひらひらと飛び回り、大きな口を開けて飛んでいる昆虫を捕食する。地上に営巣する。1997年版のレッドデータブックではランク外であったが、2006年に発表されたレッドリストでは「絶滅危惧Ⅱ類」に選定された。ランクが上がった理由として、草原や低木林に生息する種の生息環境の悪化が示唆されている。福岡県のレッドデータブックでも「絶滅危惧Ⅱ類」に選定されている。

本種は海岸の松林や丘陵地、山地など樹林地に広く生息する種であった。宗像市でもかつては比較的普通に生息していたと思われるが、今回の調査では大島で渡り途中のものと思われるものが確認されただけである。十分な夜間調査はできなかったため、現在の生息状況は不明であるが、おそらく著しく減少しているものと思われる。上記の理由により、「ランク2」に選定した。



ヨタカ 大島 2006.5.9

・ サンコウチョウ

日本、台湾、フィリピンで繁殖し、冬はインドシナ・マレー半島、スマトラ島で越冬する。日本では本州以南に夏鳥として平地から低山の薄暗い林に渡来する。IUCNのレッドリストでは「NT（準絶滅危惧）」、福岡県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。丘陵地の植林の沢筋でも繁殖するが、オオルリやキビタキより個体数は少なく、繁殖地は局地的である。しかし宗像市では比較的繁殖しているようで、オオルリよりも個体数は多い。今回の調査では城山、新立山山麓（武丸）、名残山山麓、大井下ノ原池、田島宿ノ谷で確認された。IUCNのレッドリストで「NT（準絶滅危惧）」に選定されているように、世界的にも個体数の多い種ではなく、

福岡県でも生息地は限定されており、個体数も多くない。よって「ランク 2」に選定した。

③ランク 3

・ キジ

ユーラシア大陸の中緯度地域に広く分布する。日本のキジを大陸に生息する「コウライキジ」とは別種とする説もある。平地から山地の草原、農耕地、林縁、河川敷などに生息する。現在のところ各種レッドデータブックや法律等の指定はなく、狩猟鳥獣として狩猟の対象となっている。宗像市では山ろくの丘陵地に生息し、比較的個体数は多い。大島、地島でも普通に見られる。キジは日本の里山環境の代表的鳥類として最も親しまれてきた種である。もともと個体数は多かったが、キジの生息環境である丘陵地や草原は造成され、都市近郊では近年著しく減少している。宗像市ではキジが好む谷地田が多く、現在でも比較的個体数が多い。



キジ 朝町 2006. 5. 06

・ ミサゴ

ミサゴはタカ目タカ科の大形猛禽類である。北半球全域およびオーストラリアで繁殖し、アフリカ、南アメリカで越冬する。日本では九州以北で繁殖する。主に海岸の崖地で営巣するが、内陸の樹上でも営巣する。魚食性で海域や河川、湖沼で魚を捕らえる。環境省のレッドリスト（2006年）および福岡県のレッドデータブックとも「準絶滅危惧」に選定されている。宗像市では大島、地島の海岸で繁殖し、個体数も多い。沖ノ島でも繁殖するものと思われる。海上や釣川沿いのほか、かなり小さなため池にも採餌のため飛来する。1980年代には限られた場所でしかみられなかったが、1990年代以降個体数が増加し、魚のいる水域ではどこでもみられるほど個体数は増加した。今

回の調査により、大島、地島では高密度で繁殖することが明らかとなり、繁殖地として重要である。



ミサゴ 地島 2006.6.3

・ サシバ

ロシア沿海地方、中国東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、東南アジアで越冬する。日本では九州以北に夏鳥として渡来し、南西諸島では越冬する。丘陵地や低山の樹林に渡来し、繁殖する。樹林に隣接した水田（谷地田）や林道、伐採地でカエル、ヘビ、トカゲ、ネズミ類、昆虫類などを捕食する。

環境省のレッドデータブックではこれまで掲載されていなかったが、2006年12月に発表された最新のレッドリストでは「絶滅危惧Ⅱ類」とランクアップされた。これはサシバの主な生息地となっている丘陵地、特に谷地田が開発により各地で姿を消しているためと思われる。また、同じような環境に生息するオオタカが「絶滅危惧Ⅱ類」から「準絶滅危惧」にランクが下がったのに対して、サシバはランク外から「絶滅危惧Ⅱ類」とアップされたのは、オオタカがドバトやカラスなど都市に生息する鳥類を餌として繁殖できるのに対し、サシバは主に両生類・爬虫類を餌とするため、開発の進んだ地域では繁殖できる樹林が残っていても餌となるこれら小動物が豊富に生息しなければ繁殖できないためと考えられる。福岡県のレッドデータブックでは「準絶滅危惧」に選定されている。

宗像市では市を取り囲む山域や丘陵地に渡来し、繁殖する。現在のところ宗像市では比較的普通に生息している。しかし環境省のレッドリストに新たに掲載されたように、各地で減少しており注目されている。今回の調査ではサシバの繁殖場所を十分に把握するに至っていない。



サシバ 大島 2006. 4. 8

・ **ハヤブサ**

ほぼ全世界に生息する。日本では九州以北で繁殖し、全国に冬鳥として渡来する。福岡県では主に島嶼の崖地で繁殖するが、山地の崖や採石場などでも営巣する。また、近年人工構造物での繁殖も確認されている。環境省のレッドリスト(2006年)および福岡県のレッドデータブックとも「絶滅危惧Ⅱ類」に選定されている。

宗像市では大島、沖ノ島、地島の崖地で繁殖するほか、繁殖期に内陸でもよく観察されるため、採石場などで繁殖しているものと思われる。



ハヤブサ 大島 2006. 11. 1

・ **タマシギ**

東南アジア、インド、中国、アフリカ、オーストラリアに分布する。日本では本州以南に分布する。福岡県では留鳥と思われるが、冬はあまり見られ

ない。水田、蓮田、湿地、池、河川など水辺に生息する。冬は水路などで見られるが、少ないので多くは南方に渡っている可能性がある。福岡県のレッドデータブックでは「準絶滅危惧」に選定されている。

今回の調査では曲と光岡の水田で確認されただけであったが、これまでに田久、山田でも観察されていることから、市内の水田地帯には広く生息するものと思われる。



タマシギ 久原 2006.9.13

・ アオバズク

インド、東南アジア、中国東部、朝鮮半島、ウスリーに分布する。日本では全国に分布し、九州以北では夏鳥、南西諸島では留鳥である。福岡県では夏鳥として渡来するが、近年減少している。平地から山地の林に渡来し、社寺林や公園などでみられることが多い。

福岡県のレッドデータブックでは「準絶滅危惧」に選定されている。今回の調査では光岡の光岡八幡、吉武の八所宮、田久の若八幡宮、自由ヶ丘、大島の中津宮で確認された。夜間調査を実施すれば生息地はもっと見つかると思われる。



アオバズク 大島 2006.5.9

・ オオヨシキリ

ユーラシア大陸の温帯地域で繁殖し、冬はアフリカ、インド、東南アジアで越冬する。日本では九州以北に夏鳥として渡来する。河川敷、池、湿地のヨシ原に渡来し、繁殖する。「ギョッギョッシ、ケケシケケシ・・・」と大きな声で囀る。

福岡県のレッドデータブックでは「準絶滅危惧」に選定されている。宗像市では曲の長把池で数つがいが繁殖するほか、釣川と朝町川の合流点付近でも繁殖の可能性がある。

宗像市にはヨシ原が少なく、オオヨシキリが繁殖できる場所は長把池以外ほとんどない。オオヨシキリは全国的にみると普通種であるが、玄界灘沿岸地域ではヨシ原は減少しており、オオヨシキリの生息地は減少している。長把池は面積も狭く、繁殖数も少ないが、このような飛び地的な繁殖地は個体群にとって重要である。



オオヨシキリ 長把池 2006.5.5

・ キビタキ

日本、サハリン、揚子江周辺で繁殖し、東南アジアで越冬する。丘陵地から低山地の樹林で繁殖する。福岡県のレッドデータブックでは「準絶滅危惧」に選定されている。

宗像市では普通に見られ、赤間駅近くの樹林（多久）でも繁殖する。本種が生息する丘陵地は各地で宅地開発などにより造成され、生息地が減少している。福岡市では丘陵地ではほとんどみられなくなっている。宗像市でも宅地造成により丘陵地の開発が行われているが、現在のところ残された樹林には普通に生息している。



キビタキ 大島 2006.9.1

④学術的に重要な種

・リュウキュウコノハズク

南西諸島、台湾の蘭嶼、フィリピンのバタン島に分布する。沖ノ島では1970年代から生息することが知られており、繁殖していると思われるが、学会等には未発表である。北九州市の白島では鳴き声とヒナが確認されているが、現在の生息状況は不明である。

環境省、福岡県のレッドデータブック等には掲載されていないが、IUCNのレッドリストでは「NT（準絶滅危惧）」に選定されている。

本来の生息地は南西諸島以南で、沖ノ島との間にある離島では今のところ繁殖期の観察例はない。沖ノ島はビロウやオオタニワタリなど植物や昆虫類では南方系要素の種が生育、生息することが知られているが、鳥類の場合このような例は非常に稀であり、大変興味深い。これまでの沖ノ島における調査の結果から、沖ノ島では生息密度が比較的高く、安定して生息していることが伺われる。しかし、沖ノ島での調査はカンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメの繁殖期である春季と夏季に多く行われているが、秋季から冬季にかけての調査はほとんど行われていない。このため、沖ノ島に生息するリュウキュウコノハズクが周年生息するのか、夏季に渡ってくるのかもわかっていない。リュウキュウコノハズクは主に昆虫を餌とするため、沖ノ島で越冬するのは難しいと考えられることから、夏季に渡ってくると推測される。リュウキュウコノハズクは留鳥とされており、渡りを行う個体群は知られていない。このように、沖ノ島に生息するリュウキュウコノハズクは生態や生息状況がほとんど解明されていない。

宗像市の重要な鳥類の生息環境としては沖ノ島・小屋島、丘陵地の谷地田環境（里山的環境）、大島・地島、吉田ダム・多礼ダム、朝町川周辺農地および長把池（曲・久原・光岡）を挙げた。

① 沖ノ島・小屋島

沖ノ島は原生林が天然記念物に指定されており、沖ノ島および属島的小屋島が国指定鳥獣保護区の特別保護地区に指定され、厳正に保護されている。また、宗像大社の御神域として一般人の立ち入りは厳しく制限されている。このように沖ノ島・小屋島は手厚く保護されているため、人為的な面での環境改変等はほぼ心配ない。しかし島嶼の場合、移入種の侵入により島の生態系が壊滅的な打撃を受けることが起こりうる。実際、小屋島ではドブネズミの侵入によりカンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメが壊滅的な被害を受けたことがあり、カンムリウミスズメは現在も被害前の生息数に戻らずにいる。沖ノ島では現在既にドブネズミとノネコが確認されており、オオミズナギドリやカラスバトへの影響が懸念されている。また、沖ノ島から1kmしか離れていない小屋島にドブネズミが渡れば、再びカンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメに壊滅的な被害を及ぼす可能性がある。

② 丘陵地の里山的環境

キビタキやホトトギスが囀り、畑にはキジが散歩し、野原ではヒバリが巣を作り、上空ではサシバが舞い、水田ではカエルが大合唱をし、雑木林ではカブトムシやクワガタがたくさん採れる・・・かつてこのような風景はごく普通にみられた風景であったが、今では各地で昔話となりつつある。宗像ではまだこのような光景は残されており、今後も残していくべき風景であると言える。

里山的環境は人為的な環境であり、人の生活に密着した生態系が形成されている。このため、開発から守れば里山的環境は保全されるというほど単純ではなく、現実的にはこのような景観を維持していくのは大変困難であると思われる。

③ 大島・地島

現在のところ差し迫った開発などによる生息環境の危機はないと思われる。しかし天然記念物のカラスバトやハヤブサ、ミサゴが多数繁殖する場所であることを認識しておく必要がある。

④ 吉田ダム・多礼貯水池

吉田・多礼貯水池は宗像市でも数少ないカモ類の越冬地となっている。特に吉田貯水池では世界的な希少種であるトモエガモが近年越冬するようになるなど、重要度は増している。吉田・多礼貯水池は鳥獣保護区に指定されており、狩猟により生息を脅かされることはない。しかし周辺のため池の多くは猟区となっており、ほとんどカモ類が入らない状態となっている。このように吉田・多礼貯水池は猟期の間の避難場所にもなっている。

⑤ 朝町川周辺農地および長把池（曲・久原・光岡）

朝町川周辺は宗像市域では最も広い面積の水田地帯となっている。このため農耕地性の鳥類が最も多く生息している。タマシギが繁殖し、チュウサギが多数みられ、渡りの季節にはタカブシギやウズラシギが立ち寄るなど、希少種も多数生息している。また、長把池では宗像市では唯一と思われるオオヨシキリの繁殖地となっている。